

# “弱い”を“強い”にする発想

“無駄”や“不便”“危ない”“少ない”“弱い”が持つ可能性を探る。

戦後、効率を追求し“強い”経済力を築いた日本。

しかしバブルが弾けて以来、その経済は停滞し、社会の活気は未だ萎んだままだ。

効率化の過程で「無駄」だから、「弱い」からと捨てられたものを見直し活用することで、新たなモノを生み出し、多様性のある豊かな社会を目指す。

そんな取り組みが始まっている。

撮影／(扉)内藤サトル、(人物)高井朝瑩 取材・文／伊藤史織(JQR編集部)



携帯電話がない時代、デートの待ち合わせは、とてもドラマチックだった。

約束の場所になかなか現れない恋人。新宿駅の南口って言ったよね。時間は確かだよな。そもそも今日だったっけ？ 10分、20分……、時間が過ぎるに連れ募る焦燥感。

相手に直接確かめる術はなく、電話をかけようにも、向こうにある公衆電話には長い列が伸びている。この場を離れた隙に相手が来たらすれ違ってしまうのは確かだ。さて、どうすればいい？

## “不便”はドラマを生んだ

不幸な待ち合わせに遭遇した時、私たちは忍耐力や想像力、決断力、記憶力、そして観察力などを総動員して、相手を待ったものである。故に、約束はとても大切で、無事会えたときの喜びは大きかった。その一方で、すっぱかされた時には傷ついたし、相手の気持ちを推し量ろうともした。ところが、今では携帯電話やスマホでデートのすべてが

そつなく事足りてしまう。約束した日時はなんとなく覚えていればいい。遅れてもLINEですぐに連絡がつくから時間にルーズにもなったし、そもそもそれが悪いと思うこともない。

## 便利と引き替えに

確かに世の中は便利になった。だが、私たちはそれと引き替えに、ドラマの主人公を演じることもなくなってしまったのである。

もちろん過去に戻ることも、今さら手に入れた便利さを手放すこともできない。しかし、“不便”故に私たちの身に“有益”なことがあったのは確かだ。

“不便”だと忌み嫌い、“無駄”と言って省き、“危ない”からと避け、“少ない”からと無視し、“弱い”からと気にせず踏みつける。

ネガティブに捉えてきたそれら“弱い”事柄を持つ“強い”に着目し、活用すること。それができれば、私たちはまだ見ぬ豊かさを手に入れられるに違いない。

写真のMuは、むにやむにやと話す目玉だけの“弱い”ロボット。そばに置くと、消極的な子どもでも、Muに積極的に話しかけるようになる。